

# 西尾幹二全集

全22巻

国書刊行会

全著作を収めた  
初の決定版全集



私は子供の頃詩人になりたいと思っていた。まさか「政論家」になるとは思ってもいなかった。

若い頃自分は語学の天才だと思っていたが、そうでないことに気がつくのに時間はかからなかった。

若い頃小説家になることを早々と断念し、文芸評論家に転じ、新聞の時評家までつめたが、根が小説好きの人間ではないことを悟り、文壇を離れた。小説には描写がつきものだが、そこが私には退屈なのである。

哲学は好きだが、哲学的人間でもやはりない。政治的自由も宗教的自由も理解できないが、私に腕を上げる「自由」はあるのか否か、それとも私の行為は予め決定されているのか、といった問題には関心もないし、理解もできない。

私は言葉が人生の核心に向かう簡潔な表現を好んだ。セネカやモンテーニュやヴォーヴナルグやベーコンやアランが好きだった。カントやヘーゲルへの探究心は途中で捨てた。ニーチェは隔々まで分るが、ハイデッガーは分らない。私は孔子よりも韓非子が好きである。

ニーチェ論を除いて、私は作家論や評伝作品をついに残していない。志していた福田恆存論も十分に展開しきれない。私は他人の人生に自分を仮託するのがへたなのである。

代わりに、私の書くものはことごとく自分の体験に基づく自己物語である。ドイツ留学を皮切りに、ソ連文学官僚との思想対話や西ドイツの学校めぐり、中教審委員や歴史教科書の会の会長時代の体験記、戦争と疎開世代である私の幼少人物語、はては自分のガン体験に至るまで、「私」が主題でないものはない。その頂点に恐らくあるのはベルリンの壁が落ちた二年後の東ヨーロッパ探

訪記である。ここでは詩人や哲学者など言葉を扱う人だけを相手に長編対談を繰り広げた。私は自由を知りたかった。世界の運命を知りたかった。その後の私の評論を規定し、動かしている。

人は自分が自分の体験の告白に執着しすぎているというだろうか。私は小説家ではないが、私小説作家につねに共感している。私は本をたくさん持っているが、いい読書家ではない。他人の本は自分の体験の補強具にしかならない。誰にしてもそうだが、「私」について以外に書くことは本当はないのである。

私は学者の道に入り、当然本格的な専門家に憧れていた。あるとき国語学者橋本進吉とその弟子たちの仕事に触れて、強い羨望の念に捉えられた。そして外国文学研究は学問にならないという——以前から分っていたが——余りに自明な矛盾を再認識した。

それでいて、専門学者と称する人で目の前の政治現実に余りに無知な人が多いのを見て秘かに彼らの「知」を怪しんだ。例えばプラトンを学ぶ研究家はプラトンが自己をとり巻く当時の世界を眺めたように、現代の世界を眺めるのではなく、プラトンは世界についてどう言っていたかの知識を得るだけで満足している。これはおかしい、と喝破した田中美知太郎に私は敬意を抱いた。

歴史の学問がどんなに専門化され、細分化されても、学者たちは今ではその中の何ひとつをもじつは信じていない。ただ過去の人がそう考え、そう信じていたという知識を集めるだけであり、調査がなされるだけである。

私の最初の研究論文は「ニーチェと学問」だった。そして『悲劇の誕生』を翻訳した。人生の入口で自分に誓約した言葉がある。大切なのは知識ではなく体験、認識ではな

く行為である、と。

『悲劇の誕生』が『国民の歴史』の基調底音をなしていると指摘してくれた一般読者の方がいて、自分でも気がつかないことゆえ驚いたが、初期論文「ニーチェと学問」が『江戸のダイナミズム』に真直ぐにつながっていることは間違いない。

よく若い頃から貴方は機軸のぶれない人だと主として政治的なことでいわれてきた。有難い評価とは思っている。しかし世間は誤解している。私は思想上のどんな確固たる立場も持たない。私には立場を疑う立場があるだけである。私はつねに否定で語ってきた。当然自分自身をも否定してきた。私は同じことを二度書かないのが秘かなプライドである。マスコミで生きるために厳密には守れなくなるが、精神は同じ階段を二度登りたがらないものだ、という古人の言葉が肝に銘じている。

私は理想家といわれるよりも現実家といわれるほうが嬉しい。理想家はたいいていの場合空想家の別名だからである。私は自分の中の空想を疑い、忌避することに情熱を注いできた積りである。

若い頃自分の才能の特性を定める尺度に、エステート（審美家）がモラリストかという物指しがあった。友人たちとの議論によく出て来た。政治的に左か右かの区別ではない。エステートに古井由吉や丸谷才一、モラリストに小田実や大江健三郎がいるといえれば政治的区別でないことは分るだろう。私はモラリストの側であった。モラリストの価値観は人生に対する「態度」である。

小田は私の同人誌仲間だった。大江は大学の同期生だった。どちらも私を敵手と見ていたようだが、小田は亡くなる前に私を懐かしんでいた。大江は私の文体まで軍国主義調であるとか言つて憎んでいるらしい。

私も若い頃から彼をさんざん批判してきたのだからまあ仕方がない。

すべては戦争観が同世代を迷走させている。他方、戦争に余りにも近い世代は国家と戦争との関係に冷静な距離感を持つことができないのだ。大岡昇平も司馬遼太郎も兵士だった。彼らは自らの体験で躓いている。余りにも戦争から遠い世代はこれまた共感という大切な歴史感覚を持っていない。戦争と国家の関係を的確に語る事ができる数少ない一人に私は入る、と秘かに考えている。

私はそもそも人間に自由はないというようなことを書きつづけてきたが、私ほど自由な人間はいなかった。理科系単科大学に務めていたのは幸運で、教授の誰も私のマスコミ発言に興味がなく、工学部系学生運動家たちは学内に私を弾劾する立看板を掲げたこともなかった。私は他人と争うことの多い人間と思う人もいるようだが、それはまったくの間違いである。私は四十年に及ぶ勤務大学で教授たちの誰とも争ったことはない。大いなる敵を見つづけるためには、小さな敵を持たないこと、これがモットーである。

私は両親から愛された人間である。ことに母の愛は大きい。小学校の先生からも愛されたほうで、今でも二人の恩師との交流がつづいている。中学、高校、大学と年をとるにつれて、教師は私を愛さなくなつた。

私の文業を最も育ててくれたのは文芸誌『新潮』である。

私の仕事には未完結のものがかなりある。まだ人生は終わらない。今後の仕事の計画表がある編集者に見せたら、先生は二百歳まで生きるつもりですかと揶揄された。

